

村落の構造とその変容

—山梨県南都留郡忍野村を例として—

山田美奈子

1. 目的

村落の人々は地縁的・血縁的に何重もの枠組の中で生活してきた。この何重もの村落の構造が都会化のインパクトを受け始め、村落→近郊村への動きを見せ始めた時、村落の構造のどの部分から崩壊していくのか、また集落間に崩壊度の差異はないかを明らかにしたい。研究地域は、近年富士吉田市の近郊村的性格を持ち始めた富士北麓・山梨県南都留郡忍野村であり、村内の二集落を比較しながら研究を進めた。

2. 結果

①忍野村は東部の内野と西部の忍草の二集落で構成され、富士山と御坂層山地に囲まれた海拔936mの盆地にある。高冷地であるため、昔から農業では自給もできない貧乏村で余業が必ず必要であった。それは、山仕事（木挽き・木かやとり）であったが、江戸時代末期～明治30年には駄賃づけと呼ばれる馬による荷物運送業、その次は養蚕と変化した。しかし、養蚕が衰退した時、内野では、山林も多く、余業として山仕事に再び戻ることができたが、忍草は山林も少なく、入会権のあった梨ヶ原が演習場として昭和11年から使用されることになり、余業としての山仕事は少なかった。

（第1章 忍野村の概要）

②これは、第2次・第3次産業人口が主体となった現在にも影響しており、内野では建築・土木関係の仕事を村内で行っている人が比較的多いが、忍草では他市町村へ通勤している人がほとんどである。米の生産調整時における現在の農業の方法

も、内野は依然として自給的農業の延長であるが、忍草では換金作物への転換・イチゴへの貸田など計算された近代的農業が始められている。（第2章 産業構造の変容）

③両集落とも血縁的意識は強いが、血縁的組織内の交流は内野の方が忍草より多い。地縁的組織で行なわれていた茅場の管理は、茅場の条件のよい忍草の方が長く続けられ、茅葺き屋根の残存数も多いが、現在では両集落とも茅刈りは行なわれていない。（第3章 社会構造の変容）

④モータリゼーション化により富士吉田市の経済圏に忍野村は組みこまれた。同時に、富士吉田市のスーパーマーケットですべてが揃う時代となった。しかし、嗜好は根強く、自家製味噌の製造率は高い（特に、内野の方が製造率が高い）。（第4章 経済・文化生活の変化）

⑤忍草の忍野八海と茅葺き屋根と富士山のある田園風景を観光資源として、昭和45年から観光化され始めたが、内野には観光資源がないため、観光化されていない。自然の風景だけによる観光収入は乏しいため、テニスコートを設備する宿泊施設が忍草では増加している。（第5章 観光化）

⑥以上のように、内野は村落の形態を残している部分が多く、より村落的である。忍草は、より近郊的性格が強く、観光化の影響もあり、村落の形態の崩壊が進んでいる。忍野村全体としては今後も近郊村的性格が強まり、都会化が進行すると思われる。また、何重もの村落の構造の中で社会構造（特に血縁的組織）と嗜好は、都会化に影響されにくく、崩壊が遅いといえる。